

『森林の少年』(四)

D・H・ロレンス & M・L・スキナー

山田晶子 訳 著

第二章(続)

4

丁度ネクタイを締めていた時にマチルダ叔母さんがぼたぼたとやって来て、ドアをノックした。

「早くね! もう準備はできたの?」

「もうすぐです!」

彼はかすれた声で、哀れな雄鶏のように答えた。

だがドアがそつと開けられて、マチルダ叔母さんが覗いた。

「まあ、ネクタイを締めているところなのね!」

彼女は、思慮深さを示す彼の服装を見て満足気に言った。そして精一杯おしやれをした姿を現わした。その背後にはグレイス、それからモニカ、そして戸口にはメアリーがいた。ジャッ

クには、マチルダ叔母さんが全員の中で一番いやらしくて、モニカが一番厚かましくて、グレイスが一番行儀が悪くて、顔が黒いメアリーが一番むかつくように感じられた。彼は不快な思いをしながらネクタイと格闘していた。

メアリーがしずしずと近づいてきた。

「ボウさん、御手伝いますわ。」

彼女は、インクのように真っ黒な目で彼を見つめながら、静かなやんわりとした声で言つて彼の前に立つたので、彼の膝の力は萎え、のどは詰まりそうであった。子羊たちの前で、顔を紫色にしながらネクタイと格闘していた。

「絶対に締められないわよ。」

モニカは黄色い目をぎらぎらさせながら言った。

「やってみましょう。」

と、メアリーが言つて断固として両手を挙げ、彼から二本の

ネクタイの先を取った。

彼は息を止め、目を天井に向けていたが、体の正面が焼かれているかのような気がしていた。悪魔の使い魔のネコに似たメアリーは、何世紀もの間ネクタイを締め続けているように思われた。ようやく彼女は彼ののど元でそれをねじって、締め終わった。まさに彼が窒息死する寸前であった。

「あなたの最上のズボン吊りなの？」

とグレイスがきいた。

「バラの蕾がついていてとても綺麗ね。」

そして、彼女はバンドに触った。

「船での最後の晩餐の時にあなたは夜会服を着ていたのね。」

と、マチルダ叔母さんが言った。

「上陸する前夜の晩の『螢の光』程私を泣かせるものはないわ。でも私がイギリスへ渡つてからもう十五年経つよ。」

「私たちの誰かがイギリスへ渡るなんてありそうもないわね。」

と、グレイスが憧れをこめて言った。

「あんたがボウと結婚しないかぎりね。」

と、モニカが藪からぼうに言った。

「彼がプロポーズしなければ結婚できないわ。」

と、グレイスは答えた。

「これから先長い間、誰にもプロポーズなんかしないでしようよ。」

マチルダ叔母さんは満足気に言った。

「彼つて、きれいな睫をしているじゃない？」

と、グレイスが冷静に言った。

「女の子の代わりだつてできるわよ。」

と、モニカが答えた。

「耳さえ見なければね。」

と、メアリーが断固として言ったのが気にかかった。彼は、メアリーは彼の男らしさを救おうと懸命になっているのだと感じた。

彼は周囲の空気が真つ赤に熱しているかのように呼吸をした。ここから脱出しなければ死んでしまうであろう。急いで

コートを着て、袖口をぐいつと引っ張った。

「なんて面白い緑のカフスなんでしょう！ ポットなの？」

と、グレイスがきいた。

「孔雀石なんです。」

と、ジャックは答えた。

「孔雀石って何なの？」

答えがなかった。彼は襟を守るために首に白い絹のマフラーをした。

「ラベンダー色の絹にイニシャルがあるわね。」

ようやく彼はオーバーコートを着て女性グループと共に公道へ出た。

「オーバーコートの前は開けておいたら？ シャツが見える

から。」

と、グレイスはオーバーコートボタンを無理矢理外した。

「この方が素適よ。モニカ、彼つて素敵に見えるわね。誰もが、この人誰？ つてきくでしょうよ。」

「この人はグラント將軍の息子さんだとみんなに言つてやりなさい。」

と、マチルダ叔母さんは、彼の横をさつそうと歩きながら満足この上なく言つた。

人生は主として持続の問題である。——これがジャックの哲学のまとめであつた。彼はこの哲学を今夕実行した。

それは教会合唱団が市役所で行つた慈善コンサートであつた。『天使はいつも輝いて美しい』が歌われ、ドイツ出身のバイオリン独奏者がいて、メルボルン出身の女性歌手が「本国」の歌を一人で歌つた。一方で地方のスターたちが様々な才能を煌めかせた。マチルダ叔母さんは、大きな本立てのように、席の端に座つていた。そして他の者たちは、ほつそりとしたロマンスの本のように、彼女ともう一人の本立ての間に押し込められていた。ジャックは、右側ではマチルダ叔母さんの波打つ温かさを感じ、左側ではモニカの電氣的なのたくるような熱さを感じていた。それで彼は灼熱の空気を吸ひ続けたのであつた。

コンサートは、彼には、恥知らずの滑稽な騒音の連続と感じられた。一つ一つのプログラムが異常に長く思われて、早く次のプログラムに移れば良いのに、と思つていた。しかし新たな

プログラムが始まると、それは前のものよりもひどく思われたのだつた。出演した人々は、惨めな程腰が低い立ち場にいるように思われた。一人の太つた着飾つた女性が頭を垂れ、丘の頂きを登る時にゴロゴロ音を立て、彼方に美しい町を見る。すると銀の鎧を着た馬上の若い騎士が輝く顔をして彼女に近づいて、その場所で彼の恋人に挨拶をする。ジャックは、痛みを感じながら驚いて彼女を見た。しかもメルボルン出身の歌手は、豊かなコントラルトながら、スコットランド訛りでうめき声を上げた。

「そして、あああゝゝ！ 故郷の大切な人々が恋しい、かの人はゝゝゝ本当に慎ましく、純朴でじみであるけれどもゝゝゝ」

「でもゝゝゝ」

「だけど我が心は私の大切な人々と共にいつも懐かしいスコットランドにあるゝゝゝ。」

ジャックは突然わめきたくなつた。一度もスコットランドへ行つたことがなかつたけれども。また現在、彼の父親グラント將軍は、妻と共にマルタ島に滞在していたのだが。そして彼には一人として「大切な人」はいなかつたし、欲しいとも思つていなかつたけれども。しかし、彼の心は今にも破裂しそうだつたので、涙を堪えるためにできることはそれだけであつた。マチルダ叔母さんは右側で少し彼に寄つてきて窒息させられそうであつた。一方モニカは左側で一層いまわしく身をよじつていた。そしてひどいメアリーは彼の様子を窺うために前へ寄り掛

かつて低く垂れた黒い目で彼を見つめた。彼は、体の前が焦げ
るような気がした。そして復讐の念が、深い所で燻つてきた。

人というものはいつも何か干渉しようとするものだ。なぜほ
うつておいてくれないんだ。「私の大切な人々」を歌うなんて
汚い奴らだ。そしてそれがどんな効果を与えたか知ろうと顔を
覗き込むのだ。

しかし、後に復讐する機会があるとしても、人生は忍耐の連
続なのだ。ようやく家に戻り床に就いた時、彼は少しの間休息
することができた。ドアには鍵がなかった。それでバリケード
としてひじ掛け椅子をもたせ掛けておいた。

そして彼はもう一度売り渡されたと感じていた。最初は未開
の羊毛の土地へ行くのだと思っていた。だがはるばる来てみる
と、彼の父親に相応しい紳士的な息子として振る舞うように強
いられたのであった。そしてあれらの女たちが周りを徘徊する
ので、ここはこの世の地獄であった。そしてあれらのゾツとす
るコンサートやいまわしい食事やひどい窒息しそうな家に囲ま
れるなんて。農業カレッジの方が遥かに良い。イングランドの
方がはるかに良い。

彼はベッドに身を投げ出したとき、ホームシックに襲われ
た。そして、決して知らない、多分これからも知る可能性がな
い場所を求めていつもホームシックに罹っているような気がし
た。彼はいつもどこか他の場所を求めてホームシックに罹って
いた。いつも現在いる場所を密かに深く憎悪していた。

人種が異なっている。この場所は、これらの人間がいさえし
なければ問題なかった。彼は女が大嫌いだった。彼女たちが自
分にすり寄ってきた後で感じた胸くその悪さが大嫌いだった。
モニカのあの黄色い目は彼を文字どおり殺しそうであった。あ
の小さなメアリーの真つ黒な目！ あのグレイスの大きな
鼻！ だけどグレイスには一番我慢できた。そして金色のくさ
りを掛けた赤毛のマチルダ叔母さんの下品さ！

彼はズボンを片隅へ、いまわしい糊づけのシャツを別方向
へ、下着もまた別方向へ投げつけた。衣類を全部脱いだ時、拳
固を握りしめて腕を伸ばした。そして何もかも捨てようとする
かのように、一生懸命ストレッチングをした。それから、世間
を振り切るかのように、僅かの勝手きままなエクササイズをし
た。彼は、体の筋肉を動かしたかった。世間との接触を振り切
りたかった。犬が水から上がって、ブルブルと体を振るうよ
うに、ジャックはそこに立つてゆつくりと、熱心にエクササイ
ズを行いながら、若い抵抗力を持った白い体から世間との接触
をゆつくりと追い払った。そして彼の髪が乱れてカールし、腕
を伸ばし若い胸を開いた時、油断のない挑戦が目に表示された。世
間を忘れ、四肢と胸から人間との接触を投げ捨てるための何か
が欲しい！ ギリシア人の体育家のように鋭く荒々しく、彼は
両腕で、両脚で空気を打った。

ついに汚れを落としたと感じるまでそうしていた。彼の血は
さらさらと流れていた。他の人間が、あたかもカタツムリが彼

の体を這い回ったかのように張りつけた薄膜を、粉みじんに払った。彼の皮膚は自由で生き生きした。ドアを睨みつけて、もつと安全になれるようにとバリケードを置いた。

それから寝巻を着て、世界が再び自分のものになったと感じた。少なくとも自分の周囲では。これが、彼が当座気にかけたい全てであった。

第三章 ワンドゥーへの旅路

1

ジャックは、翌朝夜明け前に、ワンドゥーへ出発した。ジョージさんは、南方に用事があったので、少年を馬車で運ぶことを決めた。エリスさんも馬車で帰宅する予定であったが、双児の小羊たちは残る予定であった。冷え冷えする闇の中で、ジャックは御者の隣に座るために馬車の正面を登った。彼はオーバーコートの中にうずくまっていた。この世で最高に幸せな子供であった。なぜなら、とうとう彼は「逃げ出す」ことができるからであった。彼は常々「逃げ出し」たがっていたからであった。何から？ 彼は考えたことはなかった。そして何へ向かって逃げ出すのかは更に考えたこともなかった。なぜなら、一つのことからいかに遠くへ逃げたとしても、その分だけ別のことに近づくことになるのだから。

そしてこれが自由という妖姫モーガンであった。あるいは自由の正体なのであった。彼女は君を決定的に今の牢獄から解放してくれるであろう。だが、決定的に別の牢獄へと連れて行くのである。自由というものは、ただ束縛されないことを求める人間にとつては、牢獄の交換にすぎないのだ。

馬車は俊速で進んで行った。御者が、土手道へ下つて行く時、燐光を放っている河を覚えてくれた。星は頭上で尚も輝いていた。しかし内陸では、空は明るくなりはじめていた。馬車は、湿った砂地を静かに駆けて行った。二頭の馬は、元氣一杯であった。湿った土からは芳香が漂って来た。彼等が河を渡った時には、河風が爽やかに吹いて来た。

ジャックは喋りたくなかった。だが御者は機を逸しなかった。「わしはな、毎年毎週終わりなくオールバーニーまで、ゆうに二百マイルを、二頭の馬ついで六日かかって行き来しているんじゃよ。十五マイルか二十マイルで、馬を乗り換えるんじゃ。時には、ワギンの向こうの辺地まで行ってから馬を変えられることもあるんじゃよ。」

「誰にも邪魔されたことはないの？」
「ないさ。西オーストラリアで、どいつがわしを妨害するんじゃね？ だが、もし誰かが邪魔するとしても、すぐに馬に乗った警官が来て、調停してくれるよ。わしの老いた婆さん以外、誰もわしの邪魔をせんよ。彼女は、わしの代わりに中スワン河まで馬車を運転できるんじゃ。」

「奥さんは馬車を御することができるとですか。」

「できるとも。そうするべく生まれ育てられたんだ。御して、その気がある時には、騎兵隊のように馬を怒鳴りつけるんだ。怒鳴る！ わしは、馬丁として彼女の後ろを馬に乗って行った時、彼女をそんな女だと決して考えたことはなかったよ。」

「どうして？」

「彼女に騙されたんだ。だが結局、貴婦人なんて言っちゃって女以外の何者でもないさ。『女は貴婦人以外の何者でもない』と言うことはわしにはできないがね。もし、わしがその頃彼女の前にひれふしたとしたら、蹴られることを予期するべきだったんだ。そして彼女は何をするのか？ パークゲートから出て、止まった。そのように彼女はしたんだ。わしを振り向いた。『グレイ、ここに金がある。ロンドンへ行つて、雑貨商人が買うような服を買いなさい。執事や馬丁に見えるような服を買わないで。そして商売道具一式を買ったら、服を着て、雑貨商人に見えるようにして。』わしはそれまで雑貨商人などと全然関わったことはなかったのだが。彼女は続けた。『そしてビクトリア通りの会社へ行つて、オーストラリア行きの切符を二枚手に入れてきて。』こう言ったんだよ。ただオーストラリアと言っただけなんだ。だから会社の係りが、オーストラリアのどこか、と訊ねた時わしはどう言ったらいいのか分からなかった。『わしらは一等のゲートで行くよ』と答えたんだ。するとそれはフリーマントルだったんだ。『そうなの。私たち駆け落ちす

るのよ。』と彼女は言ったよ。『結構なことだな』とわしは思った。それでわしは『いいとも、お嬢さん。』と答えたんだ。彼女は値のつけられない真珠だったんだ。エセルお嬢さんは。その時はそう思えたんだ。いまや彼女は口やかましい女に過ぎないさ。首に二重のくびきをつけられて手に負えない怒り狂った馬だよ。」

御者は、馬を鞭で打った。ジャックは彼を驚いて見た。彼は、薄ぐらい明かりを浴びて見ると白っぽい顎ヒゲを貯えた男であつた。

「それで彼女は子供を産んだのですか？」

「五人産んだよ。」

「そのことを後悔しているんですか。」

「ときどきはな。だが、誰かが騙されたとしたら、それはわしなんだ。わしは彼女のことをいつも完璧な貴婦人だと思つていたよ。だから『男らしくして！』と彼女がわしに怒鳴りつける時は、ただ彼女に言うんだ。『お前には貴婦人らしくしろ、と言うべきかい？』それで彼女は機嫌を直すんだ。」

ジャックの意識はもうろうとし始めた。奇妙でかすかなブーンという音が聞こえた。まるで遠くで銃が発射されているような。すると御者が言った。

「カエルだよ。イギリスの船が来る前に、オランダ人が来たのだが、彼等はウシガエルのガアガアという鳴き声に仰天して、それが何の音だか全然分からなかったということだ。」

馬の足音は、広がって来た土手道でくぐもって来た。そして近くの小島からカエルの驚くべきケロケロ、ワンワン、ブーン、バーンという鳴き声が押し寄せてきた。

2

ジャックが見回すと再び朝が来ていた。御者の顎ヒゲは黒かった。彼は痩せた紅い顔と黒い顎ヒゲと奇妙な灰色の目をした男で、目には嘲るような秘密を秘めていた。

「ヒゲは白いと思っていました。」

と、ジャックは言った。

「霧氷のせいでそう見えたのさ。霜だよ。他のなんのせいでもない。」

「ここで霜が降りるなんて考えてもみませんでした。」

「そうだな、まあ、しょっちゅうあることじゃないさ。イギリスとは違つてな。」

ジャックは、みんなが常になつかしい故郷を守るように語るのだと思つた。可哀想な故郷。変わりようがないのに。

男の灰色の目には面白い秘密が秘められているように、ジャックを素早く見た。

「まだ、十分に目が覚めていないね？」

と、彼はきいた。

「大丈夫ですよ。」

と、ジャックは答えた。

「ここへは住むために来たのだね。」

と、御者が言った。

「わしらは、きちんとした若者の世話をすることはできるよ。わしは五人の娘がいるが苦勞させられているよ。パースには六つの家系が、田舎にも六つの家系がある。フリーマントルにも多分六つの家系がある。そしてほとんどの家族が七人の娘を持つている。七人だよ……。」

ジャックは聞いていなかった。彼は、ある質問に返答して一人ごとを言つていた。

「僕はジャック・ヘクター・グラントです。」

「ひねくれもの。」

召し使いたちは悪口を言つていた。

「チビの悪戯小僧。」

と、叔母たちは言つた。従順じゃない。信頼できない。彼等はそのような類いのことを言つた。彼の魂は、このような意見を聞いてチクチクと痛んだ。しかし当らずとも遠からず、と思つた。

彼の母親は、どう思つていたのか？　そして彼の父親は？　彼は二人についてあまり知らなかった。時々帰つて来たが、そのときには二人は分別があつて楽しい人間であるように思われた。「さまようグラント家」と、ビューリー夫人は彼等のことを言つた。

彼は嘘つきだったのか？　みんなが彼を嘘つきと言つた時、

それは真実だったのか？ そうであった。しかしながら彼は自分が嘘つきだと真に感じていなかった。「聞かないで。そうすれば僕は嘘をつかなくてすむんだ。」それは彼の乳母の言葉であった。そして彼は、いやらしい叔母たちにいつもこの言葉を使いたいと願っていた。「ごめんなさいと言いなさい！ ごめんなさいと言いなさい！」彼がそう言いたくない時に無理に言わせるなんて、嘘をつかせることではないのか。彼の叔母たちはいつも恥ずべき嘘つきであった。彼自身は普通の嘘つきであった。彼は自分がしたことを彼女等に知らせたくなかったのだ、たとえ善行をした時でさえも、嘘をついた。

それで彼女等は、あのいまわしい「警官」という言葉で彼を脅かした。あるいはフェンスの向う側の野原に彼を落とした。そこで、彼は一種のクルーソー的ひとりぼっちの牢獄にいた。裏側に続いている長い長いフェンスと広大な草原つば。彼はじつと動かないでいた。すると叔母の一人がやってきて、フェンス越しに言った。「謝りなさい。お利口さんになると言いなさい。さもないと、夕食の時に中へ入れてもらえませぬよ。一晚中そこにいなくてはなりませんよ。」

彼は謝りたくなかった。お利口さんになりたくなかった。だから絶対に「ごめんなさい」と言わなかった。だから彼はフェンス越しに差し出されたバターつきパンを一切れももらった。それからだだっ広い野原の方を向いて、出かけた。

どういう訳かマナーハウスのキッチンガーデンに入った。召し

使いが彼を見つけて、女主人の前へ連れて行った。彼女も庭を歩いていたのであった。

「あんたは誰なの？」

「僕、ジャック・ヘクター・グラントです。」

少しの沈黙。

「あなたは誰ですか。」

「ビューリー夫人よ。」

二人は見つめあった。

「それであんたは私の庭のどこへぶらぶら行くつもりなの？」

「僕はぶらぶらしていたんじゃないやなくて歩いていました。」

「そうなの？ では、いらつしやい。わたしと一緒に歩いて行きましようね。」

彼女は彼の手を取って小道を導いて行った。彼は自分が囚われ人なのかどうかについて全く知らなかったわけではなかった。しかし彼女は優しく、静かで悲し気な女性に見えた。彼女は広く開いたガラスドアを通って彼と入った。彼は不安気に応接室を見回し、次に彼女を見た。

「おばさんはどこで生まれたの？」

と、彼は訊ねた。

「まあ、変わった子ね。私はこの家で生まれたのよ。」

「僕のママはそうじゃなかったんだ。ママはオーストラリアで生まれたんだよ。パパはインドで生まれたんだ。だから僕はどこで自分が生まれたのか分からないんだ。」

召し使いがお茶の載った御盆を運んできた。子供は足台の上に座っていた。夫人は聞いていないようだった。黒いケーキがあった。

「ママは、ケーキをねだつてはいけない、と言うんだよ。だ
けど誰かから出されたら、いけない、という必要はないんだ。」

「ええ、ケーキを食べなさい。するとあんたはさまようグラ
ント家の一員なのね。そしてどこで生まれたのか知らないのね。」

「でも、ママのベッドで生まれたと思うよ。」

「そうでしょうね。幾つなの？」

「四歳なの。おばさんは？」

「あんたよりずっと年上よ。ところで、私の庭で何をして
いたの？」

「分からない。間違つて入つてしまつたんだ。」

「どうして？」

「僕はごめんさい、と言えなかつたから。悲しくはない。
でもさまよつていたんじゃないよ。ただ歩いていただけなん
だ。牧場の外へ歩いて行つたんだよ。」

「そして私が言つたように、彼女は立派な場所で生まれたか
もしれない。だけど木のぼろ小屋で死ぬでしょう。」

「誰？ 誰が？」

「私のおばあさんのことよ。」

「見てごらん！ カンガルーの子供が道を走つて行くよ。」

ジャックは見回して、おかしい小さな動物がちよつとだけ飛
び上がり、こそこそと走つて行くのを見た。

「あれは赤ちゃんカンガルーだよ。分かるかい？ 本当に可
愛いペットになるよ。」

二人はなおも、立派な道がついている河から遠くない砂つぼ
い地域にいた。ジャックは小さなルーがぴょんと飛んで行く
のを見た。背が高いゴムの樹は、薄茶色の滑らかな幹とゆつた
りと縞模様が付いた樹皮があつて、高く真直ぐに静かに立ち、
終わりなく広がっている疎らな森のようにあちこちにあつた。
低いヒースのような下生えから伸びていた。開放的なのに、薄
気味悪くて、広大な無の中に閉じ込められる気がした。これ
が、今まで噂に聞いていたブッシュなのであつた。太陽が霧の
中から昇つて来た。そして澄んだ空に金色となつて力を帯びて
来た。ゴムの樹の葉は、沈黙という重さの中で、無気力に無色
で、重い細い刀の刃のように垂れていた。二人がもつと開けた
場所へ来て、緑のオウムの群れが、「トウエンテイエイト！」
と金切り声を上げて飛んだ時以外は、「トウエンテイエイト！」
これが、オウムの言つた言葉だと御者が言つた。下方の空気が
は、霧のせいで、まだ幾分ひんやりしていた。カササギと言わ
れている白黒の色合いの鳥がたくさん、ブッシュの中を飛んで
いた。一時は、馬車のスピードと飛調を合わせていた。また、
しばらくは、ジョーイよりも大きなワラビーが、小道を走つて
いた。そして小さな両手をだらりと下げて、絶えずそばを飛ん

でいた。

これはつまるところ、新しい国なのであった。確かに違っていた。若者の内部で、かすかな高揚感が立ち上っていった。結局、彼は、まだ誰にも拘束され得ない国へと逃げたのであった。みんなに窒息されないで、好きなことができるのだ。好きなことを好きな時にすれば良いとして、彼は何をしたいのか分からなかったけれども、とにかく好きなことをしたいのだという密かな思いがあった。明確なことは何も持っていなかった。しかしながら、この終わりのないブッシュを見た時、騒がしい緑のオウムを見た時、奇妙な慣れたカンガルを見た時、そして人には会わずにすんだ時、何かが彼の内部でざわめいたのであった。

「ここは駄目な土地なんだ。あまり役に立たんのだ。ジョージさんは役に立つと言っているが、墓地にする以外に使うようがないさ。最初はたぐさんの紳士がやって来たのだが、すっかりなくなってしまったことを考えれば、この場所はどうしようもないさね。彼等は、土地を自分のものだと言張っておいたから他の誰も手が付けられないのだよ。」

ここで、御者は、馬の背中に鞭を振った。

「だけどあんたは、ここに落ち着いて、財産を作って結婚して子供をもうけると思うよ。わしと女房のようにね。彼女は五人の子供を小屋で産んだよ。彼女自身はポンスピーチ・ホルで生まれたんだだけね。」

しかしジャックの思いは御者から遠ざかっていた。彼は、若者には自然なあの第三の状態に入っていた。その時、人は現実と夢の中間にいるのだ。ブッシュ、馬車、ワラビー、御者は、彼には現実的ではなかった。彼という人間も、彼の過去もあまり現実的ではなかった。もう一つの黙した世界が、知られているジャック・グラントから離れて、知っている世界から離れて、彼自身のもう一つの黙した核となって存在していた。深い未知の世界であるオーストラリアからさえも離れていた。

実際のところ、彼はまだオーストラリアへ来ていなかったと言える。なぜなら彼は、イングランドと船から、自分を救出していなかったからだ。彼の半分は、そこに残されたままだった。そして残りの半分が前へ進んでいた。そこで黙して愚かしく座っていた。

彼は、自分が何かを望んでいることを分かっていた。そして何かに対して憤っていた。あまりにも多くのあらゆる捜しをされたことに憤っていた。みんなは、彼が「ろくでなし」とつき合うので彼を憎悪した。だが、彼からすれば、「ろくでなし」だけがガッツを持っていると思えた。必ずしも完全に馴らされてはいなかった。彼はくびぎというものを嫌った。嫌った。嫌った。くびぎということを考えると、彼の無垢な顔は、全く悪魔のような様相を帯びるのであった。そしてくびぎを嫌うがゆえに、人々が彼に質問することを嫌った。自分自身もたいして相手に質問をしなかった。だが、今やくびぎは消え去ろうとしていた。